

【お詫びと追記訂正】

「埼玉アーツシアター通信 Vol.99」2022年6月1日発行号 山崎健太様にご執筆いただきました記事「不条理劇で無意味な世界を笑え Dance first. Think later」において、本誌掲載時に文章の欠落箇所が生じてしまいました。山崎様、及び、読者の皆様に謹んでお詫び申し上げますと共に、下記のように追記訂正いたします（下線部が追記部分）。

なお、デジタルブックは修正版を掲載しております。

<https://www.saf.or.jp/press/2022/099/>

P.5 見出し 不条理劇と身体芸の親和性

ところで、不条理演劇以前にも不条理なるものが存在していたことは言うまでもない。エスリンは不条理演劇以前の「不条理の伝統」として「サーカスやレビューや手品やアクロバット」など、「道化」、「言葉の上のナンセンス」、「夢、幻想の文学」の4項目を挙げる。『ゴドーを待ちながら』にも二人の浮浪者が三つの帽子を延々と取り換えては自分の頭に合うかを試し続ける場面があり、最近ではお笑いコンビ・A マッソが自身のYouTube公式チャンネルで戯曲を読みながらこの場面をやってみせる様子を配信して話題になった。身体的な芸は不条理なるものと親しい。その意味で、ダンス、サーカス、切り絵、演劇に音楽演奏までもが入り混じるジャンル・クロスⅠ『新世界』の悪夢めいた世界は不条理劇たるジャンル・クロスⅡを予告し先取りするものだったともいえるかもしれない。

⌘

さて、それではそんな不条理劇の意義とは一体なんだろうか。最後はエスリンの『不条理の演劇』からの引用でこの文章を終えたい。『不条理の演劇』の刊行から半世紀以上が経つ今なおエスリンの言葉は有効であり、この世界を笑えるということの重要性を改めて教えてくれる。

「究極的には、〈不条理の演劇〉という現象は、絶望とか暗い不合理な力への復帰とかを反映するものではなく、自己が生きている世界と手をにぎろうとする現代人の努力を表現するものである。（中略）人間の尊厳は、あらゆる無意味さをもつ現実に直面し、それを自由に、怖れずに、幻影を抱かずに受け入れ——そしてそれを笑うことができる能力にあるのだから」